川崎市平和館 平成29年度企画展　シリーズ へいわのためのリテラシー2

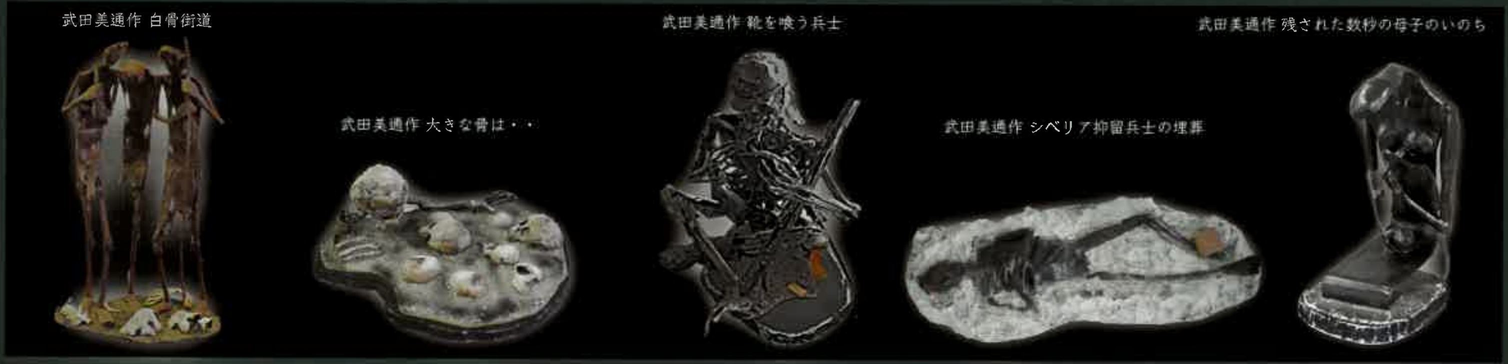
写真・造形展 ことばを超えて

第12回DAYS国際フォトジャーナリズム大賞1位
「新たな生活を求めて」ヤニス・ベラキス（Reuters）

第12回DAYS国際フォトジャーナリズム大賞1位
「新たな生活を求めて」ヤニス・ベラキス（Reuters）

第11回DAYS国際フォトジャーナリズム大賞パブリック・プライズ
「ダーティー・ツーリズム」ダビッド・レンヘル(AnHua)

第11回DAYS国際フォトジャーナリズム大賞２位
「ウクライナ　戦闘地域で生きる人々」ヴァレリー・メリニコフ(Rossiya Segodnya)



平成29年11月11日(土)～12月10日(日)

開催場所：川崎市平和館　1階屋内広場

入館無料

開館時間：9:00-17:00

毎週月曜日と11月21日(火)は休館します。

主催：川崎市平和館

協力：DAYS JAPAN、恵泉女学園 花と平和のミュージアム(恵泉女学園大学)
武田美通・鉄の造形「戦死者たちからのメッセージ」を広める会

～お問い合わせ先～

川崎市平和館 神奈川県川崎市中原区木月住吉町33-1 Tel 044-433-0171

KAWASAKI CITY

～アクセス～

JR横須賀線・南武線、東急東横線・目黒線「武蔵小杉駅」、東急東横線・目黒線「元住吉駅」徒歩約10分

写真・造形展「ことばを超えて」について

平和ではない＝非平和とはどういうことなのでしょうか。

平和学では、平和を脅かす要素を、「暴力」という概念を使って説明しています。そして、平和学の提示する暴力の概念は、武力を使った争いや、肉体的暴力や精神的暴力など、誰が行為者なのかが見える暴力だけでなく、貧困や差別など、社会の構造そのものが被害者を生み出すような平和を脅かす要素まで暴力として捉えています。非平和を言葉で考えると、とても難しく複雑です。難しく複雑である一方、私たち一人ひとりは、民主主義社会の主役として、社会にある暴力を見つめ、考え、語り交わしながら平和をつくってゆく主体でもあります。その意味では、平和のためのリテラシー力(読解力)は、平和を作ってゆくための、大切なスキルです。

川崎市平和館では、このような意味も込め、平成29年度の企画展・ミニ企画展のシリーズテーマを「へいわのためのリテラシー」としています。

平和のためのリテラシーを考えるシリーズ２回目となる企画展では、文字という記号を読み・理解するというリテラシーではなく、非平和を「感じる」ことを目的に、DAYS国際フォトジャーナリズム大賞受賞作品を中心とした写真や、鉄の造形作家　武田美通氏の作品を展示します。写真・造形展「ことばを超えて」をご覧になることが、非平和を感じ、平和な社会を考える機会のひとつとなることを願っております。

企画展関連イベント　映画上映 & 講演会

映画上映

イラク
チグリスに浮かぶ平和

綿井健陽監督作品

講演：映像ジャーナリスト　綿井健陽氏「報道は嘘をつくのか」

開催日：平成29年12月9日(土)

時間：13:30-16:30

映画上映：13:30-15:20

綿井健陽氏 講演：15:30-16:30

開催場所：川崎市平和館　1階屋内広場

無料

綿井健陽氏

1971年生まれ。映像ジャーナリスト、映画監督。98年から「アジアプレス・インターナショナル」に参加、以来国内外で取材活動を続ける。2003年には、イラクで空爆下のバグダッドや陸上自衛隊が派遣されたサマワから映像報告・テレビ中継リポートを行い、それらの報道活動で「ボーン・上田記念国際記者賞」特別賞、ギャラクシー賞(報道活動部門)、「JCJ(日本ジャーナリスト会議)賞」大賞などを受賞。

2005年に監督したドキュメンタリー映画『Little Birds　イラク　戦火の家族たち』で、ロカルノ国際映画祭2005「人権部門最優秀賞」、毎日映画コンクール「ドキュメンタリー部門賞」、米国リトルロック映画祭「ベストドキュメンタリー賞」などを受賞。

2011年、東日本大震災直後を取材したドキュメンタリー映画『311』(共同監督/森達也・綿井健陽・松林要樹・安岡卓治)が、山形国際ドキュメンタリー映画祭2011東日本大震災復興支援上映プロジェクト「ともにある Cinema with Us」、2011釜山国際映画祭ワイドアングル部門に正式招待された。

著書に『リトルバーズ　戦火のバグダッドから』(晶文社)、共著に『イラク戦争―検証と展望』(岩波書店)、『フォトジャーナリスト13人の眼』(集英社新書)、『311を撮る』(岩波書店)、『光市事件裁判を考える』(現代人文社)など。